

小町の辻

一

「二十数年来、大風大雨大地震、或いは飢饉或いは疫病等々、こうも天変地異が打ち続いたことは我国開闢以来全くないことである。

ここに集つておる人々の中にも、父母を失つた者、或いは夫を妻を子供を失くした人々は多々あるであらう。人の生を営むことは斯くも悲惨なものであり、痛ましいものであらうか。

だが、あれ……あの路傍に咲く雑草の花をみよ、与えられた生命を楽しく保つて、小さしといえ綺麗な花を咲かせておるではないか、また仰いで鎌倉山の樹々を望め、青空に今も亭々と聳えて、人の世の哀れな歴史を傍観しておるではないか。山川草木のみが天地の生を悠々楽しんで、人の命だけが、打ち続く天変地天にあえぎあえぐ、かくもはかないものであらうか。これは不思議と申さねばならない。各々方はこれは如何なる原因によるものであらうかと考えたことが

あるか。

天変地異はこれ天然の現象であつて、人間には毛頭関係のないことであると、各々方は思案するであろうが、それこそとんでもない間違ひである。自然と云うものは無慈悲ではない。万物を育成してゆくこの自然がそれ程無慈悲であるならば、人類などはとつくの昔に滅亡しておつたであらう。しからば何故、かくも悲惨な世相が続くのであらうか、親が子の物を奪つて食い、子が親を殺してその物を食らい、尼憎が人肉を喰つたと噂される今の世の中である。何人も神も仏も無い世の中と思つておる。

しかるに今この鎌倉には鶴ヶ岡に八幡宮社があつて世の人々の信仰をあつめておる。建長寺も昨年万貫の金を投じて建立され、わざわざ宋の国より道隆を呼んでこれを生き仏と崇めておる。五万五千貫の大仏が莫大な金子を投じて造立された。長谷には利益広大と云われる観音がある。その他寿福寺、光明寺、新善光寺、大倉の阿弥陀堂等々仏閣は薨を連らねて建ち並び、災を除かんとして国主は民の膏血をしぼつて仏のすみかを造立するに騒がしいが果してそこに仏がおるのであらうか。天変地天のある毎に、幕府は莫大な施物をこれ等の寺々宮々に寄進して御祈禱をしておるが、火に油をそそぐが如く、年々その災害はいやましてゆくのは如何なる故であらうか。由来わが国は神国といわれ、その神々が昼夜にこの日本国を守護するをもつて役目としておる。その八百八万の神々が守護の役目を怠つておるのであらうか……仏は常住といわれておるの

に、その仏が慈悲化導をおしまれておるのか、或は威光勢力を減じたのであろうか。各々方もこれ等を不審としておるであらう。寺々の造立は皆幕府のすることであつて見れば、各々方が疑いを起す余地もないのも無理はない。相手が神仏であつてみれば不審のたてようもないであらう。

今ここに日蓮は断言する。たとえ幕府が己れが政所を残して鎌倉中の民家を取り払い、そこに千の神社、万の寺塔を造立して御祈禱を行うとも、天変地天は必ず打ち続くであらう。何故か、この鎌倉には神や仏はましまさぬのだ、否只今の日本国には諸天善神諸仏諸菩薩がましまさぬのである。しかるが故に近年の天変地天が打ち続くのである。では何故諸天善神諸仏諸菩薩がこの国を捨てさつたのか、世を挙げて皆正にそむき人悉く悪に帰するが故である。日蓮すこしも自己の才覚知弁をもつてこれを断言するのではない。日蓮は法華経という明鏡をもつてこの暗冥の世相を照破してかく断言するのである。

人の行いは心の現われである。故にその心が曲つておれば世の中も曲るであらう。曲つておる世の中に諸天善神諸仏諸菩薩がどうしてましますであらうか。天変地天飢饉疫癘が打ち続くのは当然である。曲つておる人心を正しくすれば世も正しくなり天下泰平の国土となることはこれまた当然である。人心を正しくするものはなにか。それは正しい教である。正しい教とはなにか。曰く法華経である。

法華経こそ仏説中の極説である。仏自らが諸経中王最為第一と云われておる。仏説の如くん

ば、過去の七仏千仏遠々劫の諸仏の所説現在十方の諸仏の諸経も皆法華経の経の一字の眷属である。凡そ僧たるものは仏弟子也と任ずる以上は、仏の金言を最も重しとせねばならない。仏説以外に己義を構え自己の所見をもつて立つ者はまさしく魔作沙門である。いかに今の世の中にこの魔作沙門の多きことか、鎌倉の七堂伽藍にこの魔作沙門達が錦欄の法衣を身に纏って魔道を興行し、民の血肉をあつめた国主の施物を貪り喰らって、その身肥大すれば、やせる者は民百姓ばかりである。さればこそ鎌倉の海水は変色し、八月に雪降り六字に結氷をみるのも敢て不思議とせぬ。

これ等魔作沙門が興行する宗旨は如何なる宗旨であろうか、日蓮をしていわしむれば、

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

諸宗無得道墮地獄の根源、法華経ひとり成仏の法なりと叫ばざるを得ないのである。

応う各々方、惑耳驚心する勿れ。

これがこれ、今日、法華経の旗標たる

南無妙法蓮華経

の大旗を政所に程近きこの鎌倉の小町の辻に打ち樹てた由縁である……

「念仏無間、禪天魔、宣言亡国、律国賊だつて、ひどい坊主が現われたもんだ。坊主が坊主の悪口をいうようじゃ、世も末だよ」

「それがねえ、あんたきいてわり合いに理屈が通つてはいるんですから不思議ですよ」

「いくら理屈が通つていたつて、他人の悪口を言うのはよくないよ。まして坊さんなら、そんなこと位は知つている筈だ」

「ところが面白いことをいうんですよ。今日蓮が云うところは、敢て自説に非ず、経文に則つてこそ念仏無間禪天魔真言亡国律国賊というのだと、意気込んでおるんですぜ」

「とんでもない話だ、なんで仏様が天魔の教や、無間地獄へ行くような教なんかを説くものか。律を説いたのも真言を説いたのも、皆同じ一人のお釈迦様がお説きになつたのだ、馬鹿馬鹿しいにも程がある。大体仏様が沢山の御経を説いたのはこういう訳さ。世の中には甘いものの好きな奴もあれば、辛いものが好いと云う奴もおる。それと同様さ。」

禅の好きな奴もおれば、念仏か大好きという奴もおる。まあまあ好きずきにやれというので沢山のお経があるのだ。性欲不同なるが故に種々の経を説くとある。そんなに効力のないものなら

ば、北条時頼公という程の名君が、わざわざ宋の国から道隆上人をお呼びして、建長寺という禅寺を建てる筈もないし、念仏が無間ならば、莫大な費用をかけて、長谷にあんなでつかい仏様をつくる訳がない。まあまあ私は小町の辻に、その日蓮とかいう坊さんの話をききにゆくひまはないねえ、あんた一人で行きなさい」

「仏法と萱の雨は外へ出てきけということがありますよ。家の中に引つ込んでいたんでは、萱葺き屋根にふる雨はわからない。仏法の話も自分の家で自分の頭で考えていたって訳の分るもんじやありませんよ。一つ出かけて行つて小町の辻であの坊さんの話をきいてみましょうよ。」

五、六十年前までは、仏教の中心地は京都であつたかも知れないが、今では大きな寺かつぎつぎに建立されて、この鎌倉こそ、仏教の中心地になつてきておる。その中心地でしかも政所の目と鼻との間の小町の辻で幕府の御帰依最も深い、念禅真言を罵倒して、諸宗無得道墮地獄の根拠とやっておるんですから、勇氣だけはたいしたものですよ。私は丁度承久元年の生れで四十六歳だが、その四十六年間に、天変は百八十回、地震は百四回、大風雨七十八回、洪水十九回、火災五十四回、炎旱六回、飢饉七回、疫病十六回、騒乱三十六回というんじや、こりや全く生きながら無間地獄におるようなものですよ。生きておるのが不思議みたいなものさ。

ああ、世の中には神も仏もないものかと常日頃思つておつたんですが、この間、小町の辻で、日蓮という坊さんのお説教を聞いて驚いた。

経本を引いて今の世相を論じておるんですよ。驚いた坊さんが世の中に生れたもんだ。政治を論じ天下国家を論じておるんだから、一寸驚かされたです。坊さんというものは出家という名に隠れて、世俗のことは一向に我れ関せずえんというのが先ず相場……禅宗では承陽大師の道元禪師が、承久の乱の時に御年二十二歳で一切経を京都建仁寺で閲覽中であつたことを自慢すれば、念仏では木曾義仲が京都に攻めいつた時、その戦争を知らん顔で、黒谷で源空法然上人が念仏を唱えておつたことを有難がつている。ところがどうです。日蓮と云う坊さんは凄いことをいいますぜ。

大集経と云うお経を引き、大集経の三災の中二災早く顕われ一災未だ起らずいわゆる兵革の災なり、とか言つて、疫病と飢饉の大災害がかく年々相い続いたから、これで終りと思つたら大間違いで、こんどは兵革の災というのが後に来るんだというんです。

兵革の災いというのは、国の中に同志討ちが起り、やがては他国侵逼の難といつてよその国がこの日本国を攻めてくるというんだから驚いた。飢饉、疫病が続いた後で、よその国が攻めて来たんではたまらない。

「そんな馬鹿なことがあるか」と思わず誰かがど鳴つたら、その時日蓮という坊さんにはっこり笑つて言われた。

「そうだ貴公の言う通りだ。そんな馬鹿なことがあつてたまるものか、国の亡びるは大事の中の

大事である。その大事をば未然に防がんがためにこそ、今この日蓮がこの鎌倉の小町の辻に立つておるのだ。薬師経の五難は各々方が、現に自分達の眼でみたが、残る所の後の二難、他国侵逼の難、自界叛逆の難がまだまだ来るぞ、金光明経や仁王経に説くところの他方の怨賊来たつてこの国を侵すの難が残つておる。国をうしない家を滅せば、汝等何れの所に世を逃れようと思うのか……」温顔に似合ず、すさまじい弁舌だった。もしこれが本当なら大変なことだが、嘘だったらもつと大変なことだ。こんな人騒がせの話を幕府のお役人が黙つておる筈がない。どうです。小町の辻にいつてみようじゃありませんか」

「行きましょう。たかが坊さんの有難がらせのお説教かと思つておつたが、話の案配では大分様子が違う。さあさあ一緒に行きましょう」

「話がそうきまれば誘つた甲斐がある……さあ出掛けましょう。なにしろ坊さんが人馬の往来のはげしい道端でお説教をするというだけでも前代未聞なことなのに、その話の内容が變つてるんだからききものさ。日蓮さんに言わせると、他国侵逼だ自界叛逆だという大難の来たる原因は、皆悪法のとかに因ると言うのだ。その悪法とは今流行の念禪真言だと言うのだから變つてゐる。お前さんもさつき言ったが、そんな悪法をお釈迦様がお説きになるはずがないじゃないか、私だつてそう思つておるんですよ。ほうら御覧なさい。あそこだ、あそこだ！

おやつ、石を投げつけてる奴がありますぜ。無理もない。あんな悪口を言つて、今日まで生き

ておる方が余程不思議な位ですよ。お前さんなどは、すぐ喝つとなる方だから、手廻しのいい所で路々石の二つ三つは拾つていった方がいいですよ」

鎌倉の小町の辻、時は建長六年の春、

人々の集まる迄、音吐朗々と題目を唱えておつた聖人は、時分はよしと思われたか、

「国難来たる！」

国難来たる！王土に生まれ誰か国を思わざる者があるうか。国を思うものは暫く歩をとどめてこの日蓮がいうところをきけ……

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

聴衆に向つて先ず放つは四箇の格言であつた。

三

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

今日もまた、小町の辻に聖人の四箇の格言の声が聞える。大名小路とも武者小路ともいわれる

諸役所中の真中にある鎌倉の小町の辻である。西の方には將軍の館があり、二丁とは離れておらぬ所に執権職の屋根が見える。聖人の唱える四箇の格言も、風に乗って執権等の耳に這入ることもあろう。

その執権職は大の念仏者であり、禪の擁護者であり、一たび戦争病氣出産等々が起れば真言の力を借り、律僧はまた国師としてこれを仰ぐという、なんでも屋であるから面白い。

上の行う処、下これを習うで、民百姓は、執権職国主の御帰依深い法であるといつて、各人各説、てんでに信仰しておるのがこれ等の宗旨である。この宗旨に対する聖人の断案は、

諸宗無得道 墮地獄の根源

法華経独り成仏の法

であった。当時の鎌倉の人口は現在我々が想像するより遙かに多かつたに違いない。(昭和二十六年十一月二十一日鎌倉遊覧バスガールの説明は当時の人口二十四万と称す。現在同市の人口八万五千、筆者註) 人が騒ぐのも無理はないが、人が集つて来るのも無理はない。

南無妙法蓮華経の旗を背後にたて、前に負笈を置き、その上には法華経八軸の経巻がのつてゐる。聴衆の集りをみて、時分はよしと思われたか、聖人は温顔をたたえて口を開かれた。

「……無間地獄は死んでから後のことではない。今の世相が即ち地獄の世の中ではないか。打ち続く天変地夭の姿を何とみる。これは一体どうしたことか、日蓮は十数年来これを不思議とし

て、これを糺明するために經文に眼をさらした。

しかるにかくなることが当然な証拠を經文に見出したから、これを公言するのだ。法華經に今この三界は皆わが有なり、その中の衆生は悉くわが子なりといわれたこの娑婆世界の本師たる教主釈尊を全く忘れて他方無縁の阿弥陀仏を信仰するところより起つておるのである。娑婆世界以外の仏を頼んで、この世の中は仮りの世であるとし、弥陀の世界に生れてゆくことを念願としておる。いわばこの世の中は一夜の宿にすぎないという考え方である。これではどうして日本守護の諸天善神がこの土を守護してくれようか。われ等はこの土を去つて西方安樂浄土の世界に行くものでもなく、東方淨瑠璃世界にゆくものでもない。

では一体われ等は何処に行くのか。東西南北何処にもゆかぬ。この大地に今日蓮が立つが如く、この土に永遠に住するものである。この世の中が、余りにも悲惨な世の中だから早くよその世の中に生れたいと考える。一応もつともだ。だが、自分の子供は自分の孫達は、やはりこの土に生れ、この世の中に棲んでおるではないか。何故悲惨な世の中ならばそれをもつとよい世の中にしようと考えないのか。努力しようと思まないのか。仏は常住此娑婆世界といつて、永遠不變にこの娑婆世界に住されて、わが子たるわれわれ一切衆生に慈悲化導をたてられておられる。しかるにその仏をないがしろにして、娑婆世界の一切衆生には、全く縁もゆかりもない他方の阿弥陀仏を拜んでおるのが現状である。日本国の一切は釈迦の仏像の指をきつて弥陀の手相にこしら

えなおしておるのが今の世の中である。これは信仰の上からいえば、仏に背くものであり、実生活の上からいえば、主君に背くものであり、親に背く者である。

このような人々の集りを地獄の世の中というのである。衆生の心けがるれば土もけがれる、常寂光土なるべきこの上が、無間地獄の世の中ともなるのである。頻々たる天変地天は実にこの悪法のとがによつて競い来るといわなければならない。

そもそも念仏の法門は唐山楊州の善導和尚にことはじまる。その善導は一天四海善導和尚をもつて念仏の善知識と仰ぐといわれ、毎日の所作には阿弥陀経六十卷念仏十万辺と云い、称名念仏一辺毎に三体の仏を口より出すと云い伝えられたる人である。だがその善導和尚の臨終はどうであつたか。善導和尚最後臨終の言葉に「此の身諸苦に責められていとうべし、暫くも休息することなし」即ち所居の寺の前の柳の木に登りて西に向いて願つて曰く「仏の威神以て我を取り觀音勢至来て又我を助け玉え」と唱え終つて青柳の上より身を投げて自絶す、とあつて、三月十七日に頸をくくつたが、縄でも切れたのであろう。どさつと堅い土の上におちて、二十四日に至る七日七夜うめき叫んで死んでおる。

これがこれ、念仏の法門を最初にいい出した善導和尚の臨終である。念仏は無間地獄の業とは、日蓮が発明ではないぞ開祖御自身が証明しておるのだ。流れを汲む者はその源を忘れず、法を行ずる者はその師の跡を踏むべしとあれば、皆の衆の中で念仏を唱うる人ならば、すべから

く、師の跡を踏んで臨終の時に善導の如く頰をくくらねば師匠に背く咎があるであろう。どうじや、御返答は如何。

涅槃經に「若し仏の所説に順わざる者あらば当に知るべし、是の人は是れ魔の眷属なり」とあるが、仏の所説に従わず、經文も不用と叫びながら、しかもこれ仏説なりと自語相違の仏教を興行するものありとせば正しくこれこそ涅槃經に説く所の魔の眷属であり、天魔の教えといわざるを得ない。

今の執權職北条時頼公の帰依する所の禪がそれだ。宋の国より態々道隆を招いて建長寺を地獄谷の刑場の跡に創建したが、建長寺こそ正しく名の示すが如く地獄谷の魔城である。彼等は教外別伝、不立文字、仏祖不伝と称するが、これこそ天魔の声である。教外別伝、不立文字とは何処の經文にあるやといえ、大梵天王問仏決疑經にあると答えるが、残念ながらその様な經文は貞元開元の經録にもない、全く跡形もない偽文である。

經文不用といひながら金剛經、円覺經を誦誦し、祖師不用と云いながら達摩大師を本尊とする。經文は月をさす指の如し、月を眺むれば指は不用也といひ、仏像を焼いて尻をあぶつて大悟徹底すと独悟す、これ天魔の所業に非ずしてなんぞ、すべてが目的のための手段也といわば、父母は生れる迄の手段か、天の三光地の五穀も、我れが生きるための手段か、これ理性の仏を尊んでわれに均しと思ふ増上慢の天魔の所業である。

止観に云く「これ即ち法滅の天怪、時代の天怪」と喝破しておるが、正しくこれ鎌倉時代の天怪であり、禅こそ天魔天怪の悟りと言わねばならぬ……」